ポスター番号

P-04-22

戦略的情報通信研究開発推進事業（SCOPE）＿地域ICT振興型研究開発

「福井県地域包括ケアシステム」のためのクラウド型在宅療養情報共有システムとAIによる事象分析に関する研究開発

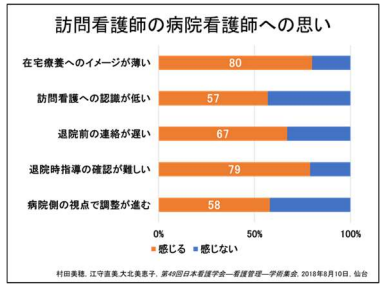
山村修[1], 大北美恵子[2], 村田美穂[2]　[1]福井大学, [2]福井大学医学部附属病院

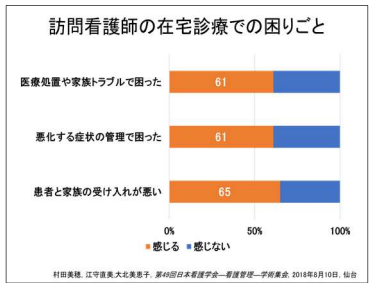
開発の目的

医療ニーズの高い状態で在宅療養へ移行する患者とその家族や、それを支える訪問看護師等が、在宅療養上の疑問や問題等の発生時に、患者の状態や療養上の情報を共有し、病院看護師等のしかるべき人材とその場で連携することで、問題解決を可能とするシステムを開発する。これにより、患者とその家族、それに携わる医療・看護・介護提供者が安全安心な在宅療養を行うことができる「福井県地域包括ケアシステム」構築の一助となることを目指す。

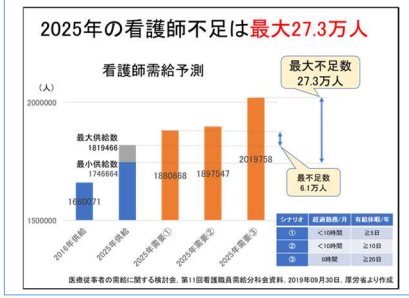
現場の課題

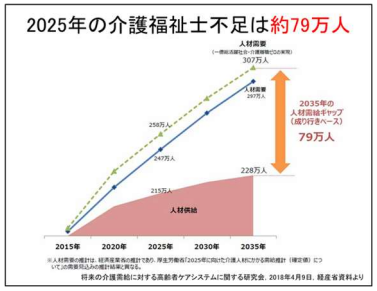
情報共有不足



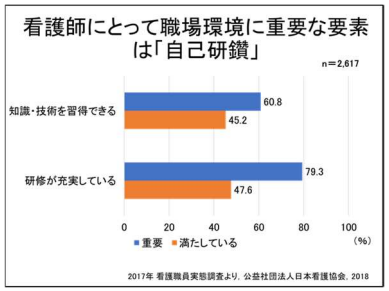


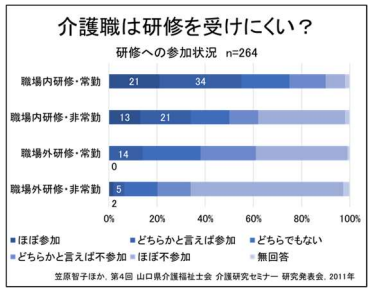
人材不足





教育機会不足





看護・介護人材が不足する中で、効率の良い情報共有と、人材教育の実現が必要

課題への対策

情報共有の効率化

画像型情報共有

・画像や動画を用いて、文書では伝わりにくい患者状態を「記述」する手間なく、効率よく情報を共有可能。
・読み手による患者の状態把握の格差を少なくできる。

チャット型情報共有

・退院前後の患者の状態、心境の変化など、退院サマリーに記載できない情報を共有。
・チャットを用いた「垣根の低い」情報連携。

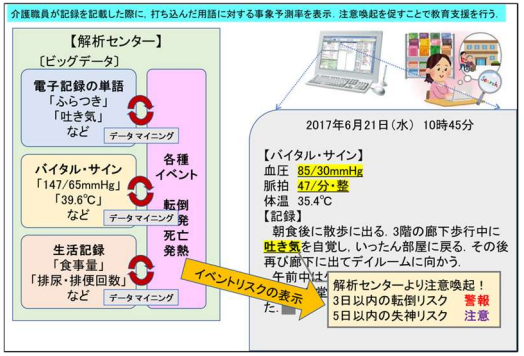
少人化支援システムによる教育

介護2施設（グループホーム、特別養護老人ホーム）の介護記録11,351記事を654（大項目15、中項目208）のカテゴリーに分類。
➜テキストマイニングの基本辞書として搭載

基本辞書でカテゴリー化

4月1日　am 0:45
「もう朝やろう」と言ってキッチンに入ろうとされ、時間を伝えるも「そんなことねー」と言われる。
〔大項目〕認知症への対応
〔中項目〕見当識障害あり

4月1日　pm 3:30
談話室で輪投げをしている。
〔大項目〕運動・レクレーション



テキストとセンサー情報による異種統合マイニング ➜ 利用者に起こりうるイベントを予測・警報発信 ➜ 利用者の自己教育へ

現状の取り組み

SCOPEの研究開発期間では介護記録に対し、研究チームの知見に基づく「辞書」を用いてテキストマイニングを行いインシデント発生予兆の検出を行ったが、現在は「介護記録作成時に用いるアセスメント項目」を用いた「辞書」を作成し、それを用いてより高精度にインシデント発生の予兆を検出するための研究開発に取り組んでいる。

ICTイノベーションフォーラム2020
戦略的情報通信研究開発推進事業（SCOPE）